

## 地域おこし協力隊として 鳥獣対応の最前線に立つ



高崎 梨徒 (たかさき りと)

平成11年6月12日生まれ。愛知県名古屋市出身。大学入学を機に北海道へ。在学時に狩猟免許や鳥獣管理士などの資格を取得。現在は北海道猟友会三笠支部に所属しながら地域おこし協力隊として三笠市役所で活動中。

### 【現場を知りたくて地域おこし協力隊へ】

現在、鳥獣対策専門員として働いている私ですが、もともとは動物の「駆除」という対応に強い抵抗がありました。幼いころから動物が好きでしたが、街中で育ったということもあり、動物と接する機会はペットショップや動物園、公園にいるハトやカラスを見かける程度しかありませんでした。その後、愛玩動物について学ぶことのできる農業高校へ進学し、動物の駆除に強い反感を覚え、全校生徒の前で意見を発表するなど、動物の保護活動を積極的に行っていました。

考えが変わる転機となったのは大学在学時の海外留学（モンゴルやマレーシア）で他国の文化に触れたことです。そこで、「地域、生活、立場、文化はそれぞれ違うのだから考えや価値観が違って当たり前だ」ということを改めて認識しました。その後、「野生動物とヒトとの軋轢」を研究テーマにしている研究室へ所属し、道内のさまざまなフィールドへ足を運びました。そこで、北海道の豊かな自然、その地域で活動する人々、外来種を含めた野生鳥獣による農業被害や生態系被害

など、ヒトと野生動物の軋轢を目の当たりにしました。そして、高校時代のものごとの表面だけを見て批判をしていた自分の考えに疑問を持つようになりました。

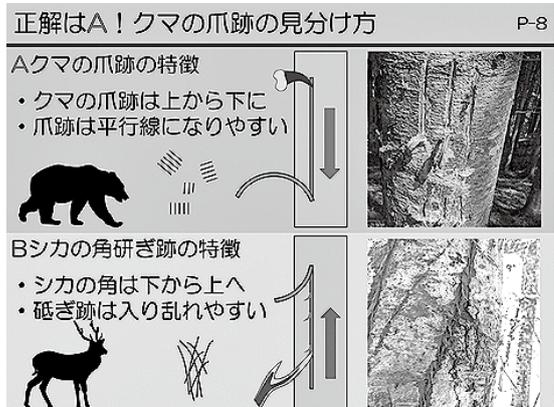
このことをきっかけに、「現場を知りたい」という気持ちが強くなり、三笠市で鳥獣対策専門員（地域おこし協力隊）になることを決意しました。

### 【三笠市の魅力と現状】

三笠市は札幌市と旭川市のほぼ中間に位置し、炭鉱最盛期は6万人の人口を誇った一大産炭地で、北海道で最初に鉄道が敷設された地でもあります。また、アンモナイトをはじめとした化石の出土も多く、歴史と魅力のある街です。しかし、産炭地として山を切り開いて街を作った歴史的な背景から、市街地の三方を山に囲まれ、さらには住宅地のすぐ裏に山があるという、非常にヒトと自然との距離が近い特徴もあります。また、メロン、スイカ、醸造用ブドウなど、人間にとっても動物にとっても魅力的な農作物が多く、野生鳥獣による農作物被害も少なくありません。さらに、桂沢湖を含む広大な自然を抱え、ヒグマの生息数も多いため、必然的にヒトとヒグマの距離も近くなってしまいう状況があります。

### 【鳥獣対策専門員としての活動】

私は、三笠市役所産業政策推進部の農林課農林係という部署に所属しており、会計年度任用職員として市役所内で勤務しています。ヒグマの出没やアライグマの被害が顕著になる春から秋は、ヒグマが出没した際の捕獲、追い払い、痕跡の確認、罠わなの設置などの現場



市民向けヒグマ講座の1ページ

対応や、農家さんが捕獲したアライグマの対処、その他野生鳥獣に関する市民からの相談を受けるなど、野生鳥獣への対応がメインになります。冬場は地図やマニュアルの作成、各種講習会用の資料作成などを行っています。また、研修会や講習会に出席し、野生鳥獣の対策技術や他市町村の状況などを市へ持ち帰り、課内で共有しています。他にも、猟友会など各種団体や市民と行政を繋ぐ橋渡しの役割も担っています。

### 【ハンターの自分にできること】



ワークショップの様子

業務外の活動としては、エゾシカの駆除を行ったり、イベントに出店してワークショップを開催したりするなど、個人事業主としても活動しています。令和4年に三笠市と隣接する美唄市にジビエ処理施設が完成し、市内で捕獲した野生鳥獣を「お肉」として市場へ流通させられるようになりました。私が捕獲したエゾシカやヒグマも基本的に処理施設へ搬入しています。販売されているジビエはトレーサビリティによって捕獲地域や捕獲者がわかるようになっていますので、もし三笠周辺のジビエを手にする機会があれば、誰が捕獲したエゾシカなのかをぜひ確認してみてください。

また、ヒグマを駆除する立場にある私ですが、だからこそヒグマのことをもっと一般の方に知ってもらいたいという気持ちが強く、イベントでは自分が捕獲したヒグマの爪付き毛皮、頭骨、ヒグマから摘出した銃弾、スコープ、ヒグマの生態や対策について詳しくまとめられた小



オリジナルのクマ鈴

冊子などを展示し、実際に見て触れてヒグマのことをよく知ってもらえるようなブースを設置しています。ワークショップでは、エゾシカの角やウッドビーズを使用して、「オリジナルクマ鈴作り」を行っています。

### 【新社会人として地域おこし協力隊へ】

大学を卒業後すぐに地域おこし協力隊という働き方を選んだため、一般企業のような「新人研修」がなく、右も左もわからない状態で社会の荒波に漕ぎ出してしまう気がして、はじめはとても心細さを覚えました。また、行政職員でありながら猟友会の一員でもあり、さらに現場に出て市民の方と関わる機会が多いため、さまざまな方の意見を吸い上げやすい立場にあります。いただいた意見のなかには厳しいものもありました。同世代の人口の少なさや、社会のルールを自ら調べ身に付けていかなくてはならないこと、そしてさまざまな利害関係者の間に入って立ち回ることの大変さも痛感しました。

そんな境遇の中で、いつも支えになったのは大学の研究室でお世話になった先生の言葉です。「潤滑油としての役割を求められるということは、人と人の間に入るということ。それは自分がすり減っていくということでもある」「1年目で人の名前と地域を覚えて、2年目で自分の名前を覚えてもらう、3年目で自分の意見が言えるように」これらの言葉をいただき、地域に入る覚悟と心構えがあったからこそ、上手くいかないうちに踏ん張れたと感じています。

### 【これからもこの地域に役立てるように】

既に任期は2年終了し、あっという間にあと数カ月というところまで来てしまいました。外から来た私のことを快く受け入れてくださり、技術や知恵を惜しみなく指導してくださった猟友会の先輩方をはじめ、市役所の職員の皆様、地域の皆様のおかげで、とても充実した経験と実績を積むことができました。任期終了後もこの三笠の地に残り、ヒグマ対応をはじめ、野生動物とヒトの間の分野でこの地域に貢献し、少しずつ恩返しをしていきたいと思っています。